

佐賀県研究成果情報（作成 2020 年 2 月）

[情報名] 佐賀県の茶園で採取したカンザワハダニの各種殺ダニ剤に対する感受性

[要約] 2017 年から 2018 年に佐賀県内の茶園から採取したカンザワハダニは 8 種類の殺ダニ剤に対し、補正死亡率 90%以上で感受性が高い

[キーワード] チャ、カンザワハダニ、薬剤感受性

[担当] 佐賀県茶業試験場 茶樹研究担当

[連絡先] T E L : 0954-42-0066 ・メールアドレス : chagyoushiken@pref.saga.lg.jp

[分類] 普及

[部会名] 茶業専門部会

[専門] 病害虫

[背景・ねらい]

近年、被覆栽培面積の増加や干ばつ発生頻度の増加からハダニ類が多発し、防除に苦慮する場面がみられている。ハダニ類は殺ダニ剤に対する感受性の低下が早いことから、チャでは年間の同一薬剤使用回数を極力少なくするようにしているが、一部で感受性の低下が懸念されている。そこで、現地圃場から得られたカンザワハダニを供試し、本県で主に使用されている薬剤に対する感受性を明らかにする。

[成果の内容]

1 . 2017 年に唐津市の 3 茶園から採集したカンザワハダニは、いずれの供試薬剤に対しても補正死亡率が 95%と以上と高く、感受性は高かった。また、2018 年に嬉野市と太良町の 4 茶園から採集したカンザワハダニも、いずれの供試薬剤に対しても補正死亡率が 90%以上と高く、感受性は高かった（表 1）。

[成果の活用面・留意点]

1 . 県内全域の茶生産地において活用できる。

2 . 検定方法は、各圃場から採集したカンザワハダニをインゲン葉上で累代飼育し、雌成虫をシャーレ内に静置したインゲン葉に接種して、25℃、16 時間日長条件下で産卵を促した。接種3日後に雌成虫を除去して、卵のみとしたインゲン葉を薬液に10 秒間浸漬して風乾した。7日間保持した後、実体顕微鏡下で孵化、生存状況を調査して生存率を求め、水浸漬区の生存率をもとにAbottoの補正式で補正死亡率を算出した。供試薬剤は、常用濃度の1/3 希釈薬液を用いた。

補正死亡率（%）= {（水処理区の生存率 - 処理区の生存率） / 水処理区の生存率} × 100

[具体的なデータ]

表1 佐賀県内の茶園で採集したカンザワハダニの各種殺ダニ剤に対する感受性 (2017-2018)

採集地	採集時期	補正死亡率 (%)				
		ダニゲッター-FL (スピロメチン) 6000倍	ハロックFL (イトキサゾール) 3000倍	ハロックFL (イトキサゾール) 9000倍	スターマイトFL (ジフルラフェン) 6000倍	ダニサバクFL (シメクトリン) 6000倍
唐津市	2017年 3.21	96	100	-	100	100
唐津市	2017年 3.17	97	100	-	100	100
唐津市	2017年 11.8	100	100	100	100	100
嬉野市	2018年 3.6	100	100	100	100	100
嬉野市	2018年 3.6	100	100	100	100	100
嬉野市	2018年 3.6	100	100	100	100	100
藤津郡 太良町	2018年 3.15	100	100	100	100	100

採集地	採集時期	補正死亡率 (%)			
		アグリメック (アバメクチン) 3000倍	スターマイトプラスFL (ジフルラフェン・ピリプロパリン) 3000倍	茶ちゃとFL (トリアゾロピリジニル) 9000倍	ダブルフェースFL (ピリプロパリン・ジフルラフェン) 6000倍
唐津市	2017年 3.21	100	100	96	100
唐津市	2017年 3.17	100	100	95	100
唐津市	2017年 11.8	100	100	100	100
嬉野市	2018年 3.6	100	100	100	100
嬉野市	2018年 3.6	100	100	100	100
嬉野市	2018年 3.6	91	100	100	100
藤津郡 太良町	2018年 3.15	100	100	100	100

注) - は未供試

注) 常用濃度の1/3 希釈薬液を用いた

注) FLはフロアブル

[その他]

研究課題名：茶病害虫発生予察事業

予算区分：国庫

研究期間：2017～2018年

研究担当者：東島敏彦・野村幸代・平野剛史